



# 京都府立医科大学 男女共同参画推進センター NEWSLETTER



平成23年度 文部科学省 科学技術人材育成費補助金 女性研究者研究活動支援事業(女性研究者支援モデル育成) —しなやか女性医学研究者支援みやこモデル—

## 京都府立医科大学病児保育室開室式 吉川 敏一 京都府立医科大学 学長挨拶



皆さんこんにちは、病児保育室開室式にお集まりいただき有り難うございます。  
ご承知のように本学では昨年、文部科学省の「女性研究者支援モデル育成」に採択され「しなやか女性医学研究者支援みやこモデル事業」を実施してまいりました。

その大きな柱の一つが病児保育室の設置でした。これまで場所や経費、利用形態など設置に向けてのワーキングを重ね、また、学内や附属病院関係者の皆様の多大なご協力・ご尽力によってきょうこに開室することができましたことを大変うれしく思います。

本学においては、女性も男性も共に働きやすい職場となるよう大学全体で取り組んでいます。この病児保育室が育児などで研究や仕事を中断したり、持てる能力を十分発揮し切れていない女性医師・研究者等への支援になりますと共に、貴重な人材確保のバネになりますことを期待しています。

この病児保育室は、文部科学省の補助金で実現した本学で初めての取組であります。また、附属病院と連携した病児保育室でもあります。府内はもとより、地域医療を担う京都府立医科大学としてのモデル事業であり、関連病院へのモデル事業として波及効果も期待したいと考えています。

開室に当たりご協力いただきました皆様、ご出席の皆様にご改めて感謝を申し上げ開室に当たっての私のご挨拶といたします。

## 京都府立医科大学病児保育室開室記念フォーラム 三木 恒治 京都府立医科大学附属病院 病院長挨拶



本学では、平成22年度文部科学省の女性研究者支援モデル育成事業に採択され、昨年男女共同参画推進センターが開設されるとともに、女性研究者支援のための事業を進めて来ました。その一環として、病児保育室がいよいよ来週7月4日にオープンする運びとなりました。それを記念してフォーラム「医療従事者の子育て両立支援とは？」を開催します。

本学の医学科の卒業生の女性比率が過去10年連続で25%を超えていますが、女性教員の割合が約9%に留まっているという状況があります。女性の医師・研究者というのはキャリア形成期とライフイベントが重なることが多く、キャリアパスにおいて、出産、子育てはハードルとなっていることを認識しています。学内のアンケート調査により女性研究者支援体制としてもっとも要望が高かったのが病児保育室の設置でした。

私も医療従事者の現場においては、代理が効かないことをよく理解しています。子どもの急な発熱などに対応できる病児保育室が早く何とかならないかという切実な声が届いていました。子育て世代の医療従事者への支援をここに具体的な形にすることができ、ようやく発進することができたと考えています。これを第一歩としてさらに子育て支援を広げて、医師・研究者そして医療従事者の道をそのまま全うしていただけるように、我々も協力していきたいと思っております。それがひいては府立医大そして、府立医大附属病院の基礎、大きな支えとなっていただくことを心より期待しています。



## 記念講演① 「三人の子育て・学童保育に感謝」 中川 正法 京都府立医科大学神経内科 教授

中川先生は大学時代を鹿児島で過ごされ、同じく医師の直子先生と結婚されると同時に一緒にアメリカへ留学されました。ニューヨークで長男が、鹿児島で次男が、沖縄に移られて長女が誕生。主に子育ては鹿児島と沖縄でされたそうです。現在は単身赴任中ですが、そんな3人のお子さんの子育てについて、お話しをお伺いしました。

### 保育園・児童クラブについて

鹿児島以外に親戚が誰もいないので、保育園とか児童クラブの集団生活の良い面が子どもたちを育ててくれたんじゃないかと思えます。保育園や児童クラブを通じて親同士のつながりも強くなって、異業種の人たちとも知り合ったり僕自身にとっても非常によかったと思えます。勉強も大事ですが、やはり優しい心とか思いやりを持たないといけない、そういう意味で保育所や児童クラブは非常にいいところだと思います。

### 子育てについて

私は高齢者医療をやっていますが、子育てすることはそばにいておじいちゃん、おばあちゃんに力を与え、高齢社会を支える力になると思います。子どもたちは不思議な力を持っていますよ

ね。成長するエネルギーを持っています。じっとしているだけでも周りは元気になるんです。お年寄りの介護は、基本的には愛情や気持ちを込めて話を聞いてあげることなんですが、子育てにもいえると思います。子どもが何を言いたいのかをじっくり聴く心の余裕が重要だと思います。

### 病児保育室について

病児保育室が出来るというのは非常にすばらしいと思えます。実際に朝起きたら熱出してるとかよくあることなので。私がお願したいのは24時間保育が非常に重要だと思います。

### 乳幼児を持って仕事との両立で頑張っている女性医師へ一言

この言葉の一つ。「しっかりした強い気持ちをもつこと」なんですよね。女性がしっかりした気持ちを持って、いろんなことがあっても少々のことでは負けないという気持ちが僕は大事じゃないかと思えます。



## パネルディスカッション「子育てとの両立“リスクマネジメント”～こんな時どうする?～」

本学の中川先生、奥山先生、峠岡先生、辻小児科内科医院の辻先生、済生会京都府病院の渡邊先生をパネラーとしてお迎えして、外園先生の司会で、医師、研究者と子育てとの両立についてお話を伺いました。

### ● 子育てについて

奥山先生は、御両親の協力を得ながら2人のお子さんを育てられた経験から、親族の協力を得る上での苦労などをお話くださいました。峠岡先生は、大学院生の夫とともに1歳の男児の子育て中で、「育児の経験がある医師だからこその医療があるのでないか」と実感されたそうです。辻先生は、ご主人のアメリカ留学に同行するため一旦は退職され、帰国されてから開業されましたが、限界まで踏ん張ろうとされた当時を振り返り、「根性や頑張りだけではなく利用できるものは利用すればよかった」と話されました。渡邊先生からは、子どもの生活時間にあわせて勤務時間を調節しながら、日々奮闘していらっしゃる様子を伺いました。中川先生は、夫婦で協力して3人のお子さんを育てられた経験をふまえて、夫の立場からのご意見をいただきました。

### ● 「こんな時どうする?」先生方への質問

まず、「実際に家事をどうされているか?」という問いに対して、「宅配・家事代行サービスを利用」「週末に購入・下ごしらえして冷凍」など、具体的なお答えをいただきました。各先生とも、周囲の人の助力やサービスを積極的に利用されている

そうです。

次に、「周りの人のサポートをどのように受けるか」という事について、親・夫・それぞれへの対応の仕方などを伺いました。どの先生にも共通する悩みは、「3歳までは母親が育てなければいけない」という『3歳児神話』を周囲から突きつけられる事で、奥山先生は「とりあえずは何を言われても感謝する」ことを続けているそうです。夫については、辻先生から「最初は家事に不慣れでもだんだん上手になるので、上手に育てることが大切」とのお話があり、各先生方も非常に共感されていました。

### ● 「病児保育室」から横のつながりを

「勤務時間の短い常勤のポストの必要性」、「学童保育や学校との関わり」などについて議論され、司会の外園先生が「今後、病児保育室を鍵にして横のつながりを作っていきたい」という言葉で締めくくられました。



## フォーラムアンケート(抜粋)

- 医局の診療体制を変えられたことをとても興味深く拝聴しました。
- 子育てで苦労してるのはじぶんだけではないとわかりました。
- 関連病院には先輩のお母さん医師がいないところもあるので、そのような病院にお勤めの先生にも輪が広がればすてきだと感じました。
- 子育て支援は親支援ばかりでなく子ども支援であるということを第一に考えていきたいと思えます。

京都府立医科大学病児保育室開室記念フォーラム 医療従事者の子育て両立支援とは？

プログラム

平成23年7月2日 午後2時～4時 京都府立医科大学基礎棟第2講義室

総合司会 三沢あき子 京都府立医科大学小児科 学内講師  
 開会挨拶 三木 恒治 京都府立医科大学附属病院長  
 病児保育室紹介 森本 昌史 京都府立医科大学小児科 准教授  
 記念講演①  
 「三人の子育て・学童保育に感謝！」  
 中川 正法 京都府立医科大学神経内科 教授



記念講演②  
 「医師のQOL向上のための環境づくり」  
 木村 修 京都府立医科大学小児外科 准教授  
 パネルディスカッション  
 「子育てとの両立“リスクマネジメント”～こんな時どうする？～」  
 PD司会 外園 千恵 京都府立医科大学眼科 講師  
 パネラー 中川 正法 京都府立医科大学神経内科 教授  
 奥山 智緒 京都府立医科大学放射線科 講師  
 峠岡 理沙 京都府立医科大学皮膚科 助教  
 辻 幸子 辻小児科内科医院 院長  
 渡邊 愛 済生会京都府病院 産婦人科 医長  
 閉会挨拶 矢部 千尋 京都府立医科大学薬理学教室 教授  
 男女共同参画推進センター長

フォーラム終了後、懇親会・病児保育室の内覧を行いました。

記念講演② 「医師のQOL向上のための環境づくり」 木村 修 京都府立医科大学小児外科 准教授

医師のQOL—これまではどうであったか？

1. 医師というのは献身的であるのが美学であり、長時間労働は当たり前という空気がある。
2. 明確な人事考課制度がない。→何をどう頑張れば自分の理想像に近づけるか将来が不安になる。

女性医師の問題

この空気の中で、長時間労働や短時間睡眠のぎりぎりの生活に加えて結婚・出産・育児となると、本当にやりたいことがあっても諦めざるをえない状況に陥るのは当たり前。小児外科を選ぶ先生は非常にありがたい、我々にとっては宝物である。その宝物を、どのように支援していくかをみんなで考えてサポートすることが大切。

結婚・出産・育児で何が障害となるか

障害となるのは 1. 理解のない家族、2. 理解のない上司、3. 理解のない同僚、4. 理解のない後輩、5. 何ともいえない空気 などである。

現状を乗り越えていくには個人の意志に頼らないシステム構築が必要

善意ある同僚たちも、仕事をカバーすることで、よくわからないうちに不公平感が募っていくことがしばしばなので、個人の意志に頼るのではなく、女性医師・研究者が長く仕事を続けられることが当たり前だと思えるシステム構築が必要。

従来の主治医制度の場合

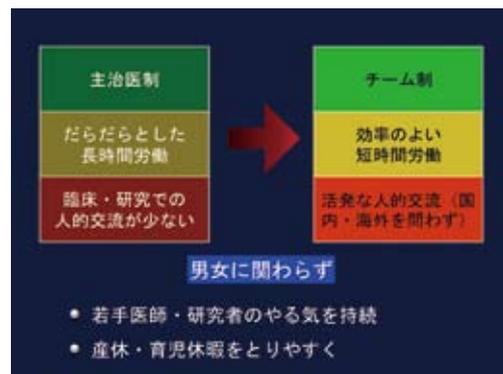
長時間労働は当たり前という考えが根底にあり、個人として責任感を持たなければならないという使命感から、一旦自分の担当患者が重症になれば何日にもわたってなかなか帰宅できないということになる。それは、主治医制では周囲からの協力が得られにくいことにも原因があり、その結果、時間制限のあるDrに責任ある仕事を担当させにくくなる。また、指導医との人間関係が一旦崩れるとストレスが溜まる一方となる。

チーム制を導入した場合

現在小児外科では2チーム制にしているが、すべての教室で、これがベストとは思っていない。その教室の規模、女性医師数や患者数など、それぞれに応じたシステムを考えることが重要と考えている。

具体的にはチームリーダーとサブリーダーを置き、毎日2回（朝・夕）のチームカンファレンスを日常化する。それによってチームの患者さんは皆で話し合いながら治療に当たるので、若い医師には偏りのない、多くの臨床経験を積んでもらえる。チーム間で治療内容に違いが出ないように週1回のリーダーカンファレンスを行い、システム上の問題点を協議し、明確化した上で、皆が納得する解決方法が得られるようにする。このようにすることは医療安全上もメリットがあると考えている。

育児等に取りられる時間は一生の中で長くはない。順番にその時期をみんなでカバーしあうことが当たり前と思える空気は、それを目指したシステムがないと生まれない。現



在、このシステムを導入してまだ3ヶ月だが、皆すごくやる気が出てきて楽しいと言ってくれている。

チーム制による手術日の固定化・研究テーマに沿ったチーム分け

全員が患者さんを診ているということは、教育システム上でも、一人一人の医師の経験値というのを数倍に引き上げることができるメリットがある。さらにチームでの手術日を固定化することで、最低週に1回は日中から時間制限なしで研究ができるようになる。診療だけでなく、リサーチマインドを同時に組み込んでいくことも視野に入れている。

産休中や関連病院勤務中の研究支援制度

研究から全く離れてしまうと、モチベーションがすぐ下がってしまう危険性がある。インターネットの有効活用や、学術論文作成支援システムを構築し、チーム全体で論文を作成するなど、個人にそれほど負担のない形で研究を継続していただける方法を考えている。



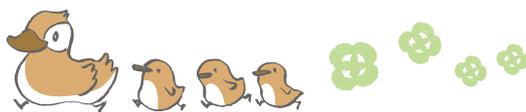
さらに心置きなく休めるシステム

評価基準を明確にすることで、大学から離れていても不安にならないようにしたい。長時間病院にいる人に価値があるという考え方をまず否定することが大切。女性だけではなく、男性にも育休奨励するなど、「自分だけが周囲に迷惑をかけているのではない」と思ってもらえれば、さらに精神的に女性は育休を取りやすくなる。また、国内・国外を問わず、短期留学も推奨し、誰でも短期留学や育休を取るなど、一時的に大学を離れても、気負わずに自然に実務に戻ることができるというところを目指したい。

まとめ

「こういうシステム構築を通して、男女に関わらず、生涯を通じてわくわくしながら長く仕事を続けていける環境が作れるのではないかと考えている」と結ばれました。

## ～京都府立医科大学病児保育室「こがも」が開室しました!～



平成23年7月4日、京都府立医科大学の学生部棟3階に病児保育室「こがも」が開室しました。

現在、事前登録児は60名となり、開室日から19日間で延べ28名の子どもたちの利用がありました。

### ●利用案内

- 設置場所** 京都府立医科大学 学生部棟3階  
**保育対象者** 京都府立医科大学に所属する研究者・学生及び病児保育室室長が認める子どもで、生後6か月から小学校3年生までの病中・病後の子ども  
**定員** 5名  
**開室日・時間** 月曜日～金曜日 午前8:00～午後5:30  
 (祝日・12月29日～翌年1月3日を除く)  
**事前登録料** 子ども1人につき、年間1,000円  
**利用料金** 子ども1人につき、1時間当たり500円  
**保育スタッフ** 保育士、看護師

### ●スタッフ紹介

- 室長**：森本 昌史(小児科・准教授)  
**副室長**：三沢あき子(小児科・学内講師)  
**看護師**：島崎 玉子  
**保育士**：那須きみ子  
**保育士**：真継 久代



スタッフ一同「一期一会」の気持ちで保育・看護をしていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### ●こがも「七夕の会」平成23年7月2日

病児保育開室記念フォーラムの開催中に、病児保育室「こがも」では「七夕の会」を開催しました。生後5か月～7歳のお子さん22名が参加してくれました。七夕かざり・大型絵本の後に、おやつをいただきました。バイオリンの演奏にあわせてみんなで歌をうたい、楽しいひとときをすごしました。

### ●ご利用の流れ



- 1 事前登録** 「事前登録票」をHPよりダウンロードし、ご記入のうえ病児保育室までご提出ください。  
**2 予約** 平日の午前7:45～午後5:45は、病児保育室へお電話でご予約ください。それ以外の時間帯は、HPの予約システムからご予約のうえ、「利用申込書」をE-mailまたはFAXにてご送付ください。  
**3 事前診察** 「診察医連絡表」をHPよりダウンロードし、医療機関を受診しご記入いただき、当日ご持参ください。  
**4 利用当日** 電話予約の方は「利用申込書」にご記入し、当日ご持参ください。

詳しい利用方法は、HPをご覧ください。

<http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel/>

お問合せ 京都府立医科大学 病児保育室「こがも」  
 〒602-8566 京都市上京区梶井町465  
 Tel/Fax: 075-251-5272  
 Email: kodomo@koto.kpu-m.ac.jp



### お知らせ

#### 1 「研究支援員雇用事業」利用者の二次募集について

2011年9月頃に3人程度の二次募集を行う予定です。  
 7月の公募では、7人の方に支援員を配置しています。  
 ※研究支援員雇用事業についてはHPをご覧ください  
<http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel/>

#### 2 「女性医学研究者等支援相談窓口」開設のお知らせ

キャリア形成の支援や研究とライフイベントとの両立などへの支援を目的とした相談窓口を開設しました。

**<対象者>** 京都府立医科大学に所属する女性医師・研究者(非常勤を含む) 大学院生・学部学生

**<相談窓口>** 男女共同参画推進センター  
 e-mail:miyako@koto.kpu-m.ac.jp TEL:075-251-5165

※詳しくはHPをご覧ください。

URL: <http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel>

### 編集後記

多くの方々のご協力をいただき、1年前より準備をすすめてきた病児保育室「こがも」が、開室の運びとなりました。病児にとってより良い保育室、そして医療従事者の子育て支援となれるようがんばっていきたくと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。また、病児保育開室記念フォーラムには100名を超えるの方々のご参加をいただき、ありがとうございました。(三沢あき子)

### 男女共同参画推進センター

〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路上ル梶井町465  
 電話(FAX): 075-251-5165  
 Eメール: [miyako@koto.kpu-m.ac.jp](mailto:miyako@koto.kpu-m.ac.jp)  
 URL: <http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel>